

「縁」 + 「楽しむ」 = 縁JOY 上海で育む絆

—— 特別活動を通して ——

前上海日本人学校虹橋校 教諭

神奈川県横浜市立南吉田小学校 教諭 八木 浩司

キーワード：在外教育施設、上海、特別活動、日中友好、小学校

1. はじめに

上海は、躍動を続ける国際都市である。中国経済の中心であり、日本に限らず、世界各地から企業が進出している。上海における日本人学校の児童生徒数は、2012年をピークに減少傾向にあったものの、ここ3年では増え続けている。

近年では、日中関係の大きな問題もないため、日本食レストランや日系の百貨店は中国人に多く受け入れられている。上海に滞在すれば、日本と遜色無い生活を享受できる。赴任前にもっていたイメージは完全に裏切られ、これからの発展にも目が離せない地域と言える。

2. 日本人学校で学ぶ子どもたちの現実

昨今、日本の教育への関心が世界中でも高いことから、現地の家庭からも入学希望が増えている。また、両親が中国人であっても、日本国籍を有している家庭の児童は入学できることから、外国に繋がる家庭の割合が増えてきている。

日本人の子どもたちは、長いこと上海生活を送っている子もいるが、大半は企業の駐在等の子どもたちが多く、多くの子どもたちは日本を旅立つ前に、「仲のよい友達と別れたくない」、「外国での生活が嫌だ」と考えている。上海では大気が不安定ということもあり、休み時間や放課後遊びにも制限がある。また、学校外で友達と会うことが難しい。教職員、家庭、商工会等の協力を経て、学校での時間を実りあるものにするすることで、それぞれが繋がりを深めてきた。その結果、学校生活を通して、自分の住んでいる中国に愛着をもてるようになった児童が多くなっている。

3. 上海日本人学校虹橋校における特別活動の位置づけ

(1) 学校のテーマを毎年考える。

特別活動主任を中心に考える学校テーマは、子どもたちの全ての特別活動の指針になるものである。私が着任してまず驚いたことは、どの場面でもこのテーマを中心に添えて学校活動や行事があることである。

平成27年度は、「Pスマイル」。平和と笑顔あふれる学校にしていこうという思いが溢れていて、お決まりのポーズもあった。

平成28年度は、「ほっと」というテーマになった。前年度を踏襲して、「ほっとする学校。HOT = 何事にも熱くなれる学校」という思いを込めてテーマを設定した。

どのテーマも、子どもたちに浸透した一方、特別活動主任を引き継いだ身としては、色々悩ましいこともあった。子どもたちに身につけさせたい力や、特別活動の目標や内容も熟読して、年度末から苦悩の日々が続いた。そして、最終的に「縁JOY」というテーマで、学校を創っていこうと決めた。

(2) 子どもたちと共に創り上げた「縁JOY」

日本人学校で働いて強く感じたことは、「ここへ来たからこそ出会えたのだ」という奇跡とも言える感情であった。縁を感じていたからこそ、与えられた時間を共有して、楽しい思い出を創ってもらいたいという思いが

芽生えてきた。そのような経緯で生まれた平成29年度のテーマ「縁JOY」であった。このテーマには、上海で出会った「縁」を大切に、仲間たちや関わっている人たちとの時間を「楽しむ」という意味が込められている。

「縁」 + 「ENJOY」 = 『縁JOY』 となった。

このように、決まったものは、子どもたちの心に浸透していく。大きな行事のスローガンや学級目標を決めるときだけでなく、子どもたちの合言葉にもなっていく。あいさつの後に縁JOYと言いつつ、児童が運営する朝会の場面では、声を合わせたりもする。

言葉は、子どもたちだけでなく、関わる教職員・保護者の心にまで深く根を張る事になり、1つの共同体のような役割を担う。日本を離れていても、繋がっている仲間との絆を感じられるものになっていった。

縁JOY

4. 学校が楽しくなる特別活動 ―具体的な取り組みと成功させるために―

(1) 全校投票で決めたマネキンチャレンジ

児童代表で構成される中央委員会が、全校児童で縁JOYできる企画を打ち立てた。みんなで取り組みたいことを各学級から集め、代表議会で話し合いを行った。最終的には全校投票を行い、1200人が一斉にマネキンとなる、マネキンチャレンジに決まった。本気でギネス記録を狙いに行くという案もあった。しかし、金銭面での折り合いもつかなかったことも理由になるが、子どもたちの一番したいことを中心に添えて、日本国総領事館に認定委員を派遣してもらったプロジェクトとした。



虹橋ギネスという名前で、子どもたちがプロジェクトを組み、各学年と学校全体で行うマネキンチャレンジになった。天気もよい中、教職員だけでなく中国人スタッフも交えたチャレンジは大成功だった。子どもたちだけでなく教職員も笑顔があふれる一日となり、縁を楽しむことができた。

(2) 具体的な取り組みを実現する為の大きな壁

先に述べた、全校で取り組む活動以外にも、様々な行事の中心に特別活動がある。70人を越える教職員のコンセンサスを取ることは容易ではない。多忙な中で、大きな行事を成功させる為には、活動の趣旨を理解してもらい、協力してもらうことが不可欠である。十分に調整ができなかったり、一方的な思いで進めると、意見が対立してしまったりすることもある。そのためには、丁寧な説明や内容の精選が必要である。そのために尽力したことを2つあげておきたい。

1つ目は、自分の言葉で伝えるということである。会議での一時的な提案だけでなく、教務や学年主任には、事前に根回しするようなこともした。それぞれの立場から出てくる意見は真摯に受け止め、修正できる所は柔軟に対応してきた。子どもたちと活動を創る中で、大切なのは担任の語りかけだと考える。全員が自分ごととして捉えられるように放課後に色々な職員とコミュニケーションを積極的に取ることを意識した。

2つ目は、特別活動通信というもので、リマインドした。特別活動部は全部で7人いたが、それぞれが行事の主担当を担っていた。主担当の思いを大切に、それぞれの学年で丁寧な説明を心掛けた。担当が渦の中心となり、活動を推進していく。その中で、友好的に活用したのは、紙媒体である特別活動通信である。

教職員は、日々の業務に忙殺されているので、大きな行事の途中経過や当日の動きなどを、必要なタイミングでリマインドすることに努めた。当日は、その書類を見れば、自分たちがどのように動けば良いのかを簡潔に分かりやすく提示したことで、円滑に活動をすすめることができた。



5. まとめ

中国で生活することは、海外を身近に感じながら成長していくことである。一面的な考えから脱却し、感じたことや経験したことを多面的にとらえて成長していくことができる。学校だけでなく、海外での生活での学びが、未来の日中友好を築く礎となっていくのだと感じる。特異な環境に身を置くことで、感じられることや経験したことを活かして、関わった児童が将来リーダーシップをとる人材になっていくことを期待してやまない。

6. 終わりに

上海での3年間は、子どもたちからだけでなく、苦楽を共にした教職員から学んだこともたくさんあった。それぞれの職員が自分の担当を全力で取り組む姿には、子どもたちの成長や笑顔のためという共通点があった。今まさに伸びようとしている子どもたちを前に、決して妥協せず、全力でサポートをする教職員と共に過ごせたことは、わたしの財産となった。虹橋校で関わったすべての方に感謝したい。